No.1

キラリ☆中野のチカラ

（左から）

西澤（にしざわ）　悠至（ゆうじ）　さん　【西町】

湯本（ゆもと）　芳久（よしひさ）　さん　【小田中】

長野県代表として ダーツ全国大会準優勝

2012年度ダーツ全国大会インターリーグに、長野県代表として出場した「リボルト・ブラッツAチーム」が準優勝に輝きました。

チームの主力メンバーとして大会に出場し、個人でもプロとして活躍する市内在住の西澤悠至さんと、湯本芳久さんにお話を聞きました。

○ダーツを始めたきっかけ

西澤・湯本　飯山市で働いていた7年ほど前、仕事帰りに2人で訪れたダーツバーで、遊びでダーツを始めたのがきっかけです。

徐々にダーツの魅力に惹かれ、2人で大会に出場するようになりました。大会で好成績を残しているうちに、長野県代表として4年連続で全国大会に出場しているダーツチームの「リボルト・ブラッツ」へスカウトされ、加入することになりました。

○ダーツの魅力とは

西澤　ダーツの台があるだけで、年齢や性別、天候などに関係なく、幅広いジャンルの人たちがいつでもみんなで楽しめるところに魅力を感じます。

湯本　西澤さんとは年齢が5歳離れていますが、ダーツという分野では年齢に関係なく競技を通じて交友を深めることができます。

また、ダーツ仲間を通して新しい仲間が増えたり、人との繋がりが増えることが一番の魅力だと思います。

○今後の抱負について

西澤　現状に満足することなく、より良い成績を目指して頑張りたいです。また、私が経営するダーツバーでは気軽にダーツを楽しめます。皆さんにダーツの魅力を知ってもらい、ダーツを始めるきっかけの場所になれば嬉しいです。

湯本　モチベーションを保ちながら向上心を忘れず、家族もダーツも大切にしていきたいです。

応募コーナー

○広報クイズ

■今月のプレゼント

西丸優子さん「サイン色紙」…2人

問題

「広報なかの」は今月号で「●号」になりました。

クイズの答え、住所、氏名、年齢、電話番号、世帯主名を記入し、今月の広報で参考になった記事、今後知りたい情報などをご記入いただき、7月25日㈭までにご応募ください。

※当選はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます。

○我が家のアイドル

平成22年4月2日から平成23年4月1日生まれまでのお子さんを募集します。（先着5人のみ掲載）

①お名前（ふりがな）②生年月日③性別④応募者の名前⑤電話番号⑥メッセージ（30字まで）を明記し、写真データを添付して、7月16日㈫までにご応募ください。

問い合わせ・応募先

〒383－8614（住所記載不要）

庶務課秘書広報係

☎(22)2111（内線212）

Eメール　koho@city.nakano.nagano.jp

No. 70

市民リレーインタビュー

町田真里子さんからのご紹介

福祉で人の役に立ちたい

三井　詩穂（みついしほ）さん
（団体職員・田上）

○自己紹介

福祉関係の大学を卒業し、4月から市内の特別養護老人ホームで介護士をしています。

まだ慣れないことが多く、勉強の毎日ですが、幼い頃から目指していた仕事なので充実した日々を過ごしています。

○今の仕事を選んだ理由について

祖母の介護をしているうちに、介護の仕事に就きたいと思うようになりました。

利用者の方から「ありがとう」と言われる瞬間がとても好きです。また、利用者の方の笑顔を見ると、この仕事を選んでよかったと思います。

▲満開の桜を見るととても癒されます。

○中野市のイメージについて

自然が多く、緑に囲まれているとても落ち着くことができます。

通っていた旧中野高校の桜がとてもきれいで、春には桜を見に出掛けています。満開の桜を見ると、良い気分転換になります。

○これからのまちづくりに望むこと

地域全員でお互いに支えあうことができるように、幅広い年齢の人が集まれる場所が地域の中にもっとあれば嬉しいです。

○今後チャレンジしたいこと

もっと福祉で人の役に立つことができるように、さまざまな資格を取りたいです。

取得が難しい資格が多いですが、目標に向かって頑張りたいです。

池田市長のわくわくレポート vol. 1

バラまつりを終えて

一本木公園のバラまつりは、たくさんのお客さまをお迎えし、咲き乱れる花を愛でていただき、バラの花の香りに酔いしれていただくなかで、盛会のうちに無事終わった。

今年は、最終日前日にローズフェスタ合唱団の皆さんと一緒にベートーベンのシンフォニー第九の第四楽章「合唱」を歌うことができた。お聞きくださった市民の皆さんや各地からのお客さまとともに、雲間に覗いた青空に向け歓喜の歌をともに楽しめたことは、本当に嬉しくありがたく思い、まさに歓喜の時であった。今回は、東京、横浜、群馬、栃木といった各方面から応援隊も駆けつけこの上ないコンサートとなった。

音楽のまちづくりは一人ではなかなかできない。皆さんの理解と協力があって初めて、輪が広がり、次に繋がる活動が展開される。応援に駆け付けてくれた皆さんは中野市の素晴らしさをお世辞ではなく口々に褒めたたえてくれた。人が一つの目標に向かって心を一つにして取り組むことは、世代を超え、地域を超えて大きな力にもなると、あらためて確信した。応援隊の皆さんからの「観客の皆さんの一緒に真剣に聞こうとする姿が素晴らしく、中野市の人たちの素晴らしい心を知った」との言葉が、私の心に嬉しい余韻をいまだに残している。

中野市のバラは広く知られるようになった。花という視点で中野市をみると、実は中野市はシャクヤクの生産量も日本一である。トルコギキョウやスターチスなど花の生産も盛んであり、こうした花を季節で繋いでいくことにより、花の中野市というストーリーも展開できるのではと、また、夢が膨らむ。それにしても中野市は資源豊富な都市だと、これからのやりがい、生きがいを感じている。